

投句欄 自由律の泉 ㊤

- | | | | | | |
|----|-----------------------------|---------|----|--------------------------------------|---------|
| 1 | ここを起点に未来に向かって太い線をひく | 久光 良一 | 11 | 馬蹄の響き迫りきて急かす決断 | 田中 直心 |
| 2 | 皺だらけのごつい手愛 ^{かな} しい | 植田 鬼灯 | 12 | じたばたせず次の日に忍び込む | 一の橋 世京 |
| 3 | 碧天に 並木の夢境 | アカホリ フキ | 13 | 頭なでなで3ミリカット生きてるを感じつつ | 白松 いちろう |
| 4 | 憎い程まぶしい梅雨明けの月だ | 無 一 | 14 | 夏の雨たぶん自殺はしないと思う | 平林 吉明 |
| 5 | 中華という食に潰される日本 | 大岳 次郎 | 15 | 母に似ていく／姉を診ている／病室 | 見崎 厚志 |
| 6 | 葬儀の翌朝の雨を聴く | 金澤 ひろあき | 16 | 施設の姉を見舞う | 小山 榮康 |
| 7 | 新札誕生四方八方首筋痛 | 野谷 真治 | 17 | 夕風穏やかに背を押し 霊 ^{たましい} との別れに行く | 部屋 慈音 |
| 8 | 思春期 鶴折る子の遠い目 | 原 さつき | 18 | 鳴きながら落ちた蟬の横に座る | 富永 鳩山 |
| 9 | カエル鳴き金平糖の星ふる七夕 | 竹内 朋子 | 19 | 定刻の船荷物だけを持って行った | 青井 こおり |
| 10 | 土砂降りの梅雨 心もずぶぬれ | 増田 壽恵子 | 20 | 待合室のテレビから鐘の音 今日長崎 | 富永 順子 |
| | | | 21 | 蟬の声子供の頃聞いたセミの声 | 岩井 汗馬 |

- 22 石に聴く きみどこからきたの 新山 賢治
- 23 蝉しぐれの声の中へ忍び寄る秋 佐瀬 風井梧
- 24 山際より滝のごと雲は流れ 湯原 柳泉洞
- 25 送り火の空沢山の星に迎えられ 山本 説子
- 26 泣いて泣いて八月はたまごかけごはん 井尾 良子
- 27 ガタガタの足にのって山を下りてきた 泥谷 文吾
- 28 風にふりむけばただ夏の月 篠原 紀子
- 29 目覚めればここひつじだねわた毛だね 大迫 秀雪
- 30 日本勝てば私も頑張ろうと思ういちにち ちば つゆこ
- 31 アルプスの天然水を掬って飲む 池田 恵三
- 32 猛暑に負けめだか浮いている 荻島 架人
- 33 今わたし脱皮の途中触れないで 黒瀬 文子
- 34 母さんカマキリ玄関ドアを占拠する 平岡 久美子

● 泉²³より 一句鑑賞

盛り塩も夏めいて

木村 浩

▼京都で暮らしていたとき、店先に盛り塩がされているお店をよく見かけました。打ち水がされた石畳と盛り塩、暮れかけた街並み、灯りだすあかり、祇園祭の近い頃の京の風情が蘇るようです。(篠原 紀子)

空っぽにして逝きたい

植田 鬼灯

▼私も、逝く時は、そうありたい。(無 一)

▼うくん、一読して魅かれましたが、はて、どう感想を記せばいいのやら。同感・潔さ・寂しさ・無欲など思いが溢れ、たった一行の威力を感じました。(原 さつき)

▼本当にそう思います。何を空っぽにするかはいろいろあると思います。が、先ずは断捨離。なかなか捗りません。少しずつ少しずつ頑張ります。が……？(山本 説子)

うれしくてうれしくて雑草が春

泥谷 文吾

▼無常の世の中、気持ちは明るくありたい。(アカホリ フキ)

姉の猫背が母に似て銀杏を拾い

小山 榮康

▼順番に順番に家族がそれぞれ年取って行くんですね！(見崎 厚志)

▼年を取ると遺伝によって与えられたものが表に現れてくるようだ。お

姉さんの体型や所作が母のそれに似ているのを見て血にある愛情が湧き出てくる様子が大きく頷ける。温かいですね。

(部屋 慈音)

わたしの大切なもの見つけにきた地球

竹内 朋子

▼作者の大切なものって何なのでしょう。地球ではない星からやっとなって来たのに、地球はどうでしょう。戦い事、人の殺し合い、絶望以外の何ものでもない。私の求めていた大切なものいったどこにあるのでしょう。大きな声で叫びたい。

(井尾 良子)

雨降って森は薫りを深くする

黒瀬 文子

▼雨降りにはぼくにとってはイヤなものではある。森にとっては恵みである。森の湿り気を含んだ薫りに雨が加わることによって、森がかえって更に深みを増していく。まさにこれは人生そのものであるように思える。

(大岳 次郎)

▼薫りを濃くすると言わず「深くする」とした所に脱帽しました。

(ちば つゆこ)

母の日のあじさい 月のうさぎだつて

平岡 久美子

▼月のうさぎとは素敵にお詠みですね。私も母の日に七年間あじさいの鉢植えを貰いました。花が終わりましたら庭に植えました。今花色は変わりましたが、満開の時は見事に、私を励ましてくれます。

(増田 壽恵子)

深い闇を抜け濃い闇となる

一の橋 世京

▼どちらも闇なのです。でも闇を突き抜けたところには、また新しい光が差ししてくるように思えます。闇はまた希望かも知れない。

(平岡 久美子)

四十八で死んだ母のずっと先を生きている

青井 こおり

▼親に早く死に別れると老いかたを見習うことができない。私の父も私が十歳の時に三十五歳で戦死したので、私は老いた父を見ることができぬまま八十九歳の馬齢を重ねてしまい、若い遺影の父に朝夕話しかけている。

(久光 良一)

思い出も 顔も忘れて 面会室

見崎 厚志

▼不音だった卒寿の姉と介護施設で会うことが出来ました。そこでは何もなく忘却の姉の眼がありました。

(小山 榮康)

▼何もかも忘れてしまえば、別れの悲しみもなくなるのだろうか。

(泥谷 文吾)

孫とした講習会はチョコキの出し方

田中 直心

▼可愛らしい姿だ。言葉にしても形にしても、チョコキとまだいえぬのではないか。チョコキ！などといって揃った指を頑張つてそり返してでもいる絵が浮かぶ。素直な句が魅力的。

(湯原 柳泉洞)

風よ吹け 俺に吹け 帆を満たせ

部屋 慈音

▼「吹け」の後の空白の切れが、その都度風に力を与え、帆に力を滾らせ、力強い出発を感じました。

(田中 直心)

丸くなって父のドーナツ穴

さいとう こう

▼ユニークな視点。あまり説明もないのがいい。「父のドーナツ穴」に驚いた。私の父は亡くなって十年が過ぎた。ドーナツなど、時に買って来たことを思い出した。

(野谷 真治)

濡れたあじさい青の重さ

篠原 紀子

▼「青の重さ」に心情が込められ、短律の中に深い愛と美しさ……優しい気持が生まれてきました。

(竹内 朋子)

手から箸が転がり始めた雨音

富永 鳩山

▼月と共に加齢をかんじます。知らず知らずのうちに認知症が始まるのでしょうか。覚悟をしなければなりません。「雨音」が心に染みてきます。

(白松 いちろう)

▼この句を読んで三国志の雷怯子の場面を思い出した。手から箸が転がってしまったのはどういう理由なのか気になった。

(岩井 汗馬)

▼今までは何も意識することもなく箸をとっていたが、この頃手から箸が滑り落ちるようになった。最後に置かれた雨音でしみじみその老いの気持ちを伝えている。

(佐瀬 風井梧)

あの人死んで聞こえた秒針の音

佐川 智英実

▼今夏、大切な友人を亡くしました。信じられない思いで葬儀に出席しました。働きはじめて以来の長い、そして大切な時を共有しました。これから共有し得ない時も流れて行きます。君とすごした時が切ないです。

(金澤 ひろあき)

猛暑 皿まわしの皿がまわらない

富永 順子

▼句を鑑賞するうえで、多くの場合、句の意味を考え共感し感情を迫体験することだと思えますが、句から意味が消えた時、詩が立ち上がってくるように思います。「猛暑」と「皿まわしの皿」との間にある一字空けに不思議な詩を感じました。自然の脅威と人間の行為、意味では繋がらない破綻を感じました。

(平林 吉明)

消えてゆく私にルビをふる

平林 吉明

▼ルビは、ある文字を全く異なる読み方にしてしまえる。消えてゆきながら、自分を全く違うものにしてしまえる。得てして人生とは、そんなものかも知れない。

(大迫 秀雪)

ふはふはと酒のやうに生きるがよろしく

湯原 柳泉洞

▼自戒だの反省だの余計なことは脇に置いておいて、こんなふう生きるのがよしと思えてしまう句です。

(青井 こおり)

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

へ送り先へ 〒193・0832 八王子市散田町2・58・4

平岡久美子

メール izumi.jiyuritsu@gmail.com

へ締め切りへ 2024年10月20日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、自由律俳句協会のホームページや公式X、機関誌などでも紹介させていただきます。ご了承ください。